地域文脈からみた「まちの居場所」の形成に関する研究

キーパーソンの課題解決行為に基づく千里ニュータウン「ひがしまち街角広場」の形成過程の考察

STUDY ON FORMATION OF “A PLACE FOR COMMUNITY” FROM THE ASPECT OF AREA’S CONTEXT

Comprehending formative process of “Higashimachi Machikado Hiroba” in Senri New Town
based on the actions of solving issues by the key persons

木 多 道 宏*
Michihiro KITA

Formative process of “Higashimachi Machikado Hiroba” was specified by analyzing development of residential management system in the neighborhood unit of Senri New Town, conducting the interviews to the key persons. Outline of the findings are as followings:

1. Number of intermediate groups between local government and organizations for managing apartment complex, increased from the second period to the fourth one.
2. Intermediate groups have been solving the residential issues such as making groups, physical improvement, making rules, and managing events, by collaboration with other groups and key persons, especially during the fourth period.
3. “Higashimachi Machikado Hiroba” was actually established by the key persons with their experiences and human links, which were accumulated through their management of the residential environment.
4. “Higashimachi Machikado Hiroba” gave opportunities of establishment for new groups, which solved residential issues outside the neighborhood.

Keywords : Area’s context, Place for Community, Management of residential environment, Key person, Solution of Issues

地域文脈, まちの居場所, 住環境運営, キーパーソン, 課題解決

1. 研究の背景と目的

近年、NPO 法人、任意団体、もしくは個人が設立・運営する地域住民のための居場所が各地に生まれている。これらに共通する特徴は、居場所元来の意味^{注1)}に加えて、「住みなれた地域で安心して住み続けることができるよう、日ごろから誰もがいつでも気軽に交流できること」^{注2)}であり、「個人の中だけに閉ざされるものではなく、人と人、人と地域を結びつける」^{注3)}という意味を併せ持っている。その呼び方は、コミュニティ・カフェ、まちの縁側、まちの居場所、まちなかの居場所、ふれあいの居場所など様々であるが、本論では、「まちの居場所」を用いることとする^{注4)}。

「まちの居場所」をいかにデザインするのか、あるいはいかにその形成を誘導することができるのか。この課題を解くアプローチは、運営のしくみやその柔軟性、中心となる人物の運営行動の分析から進められてきた。例えば小松ら^{注5)}は愛知・岐阜・三重における 231 件の「交流の場」を特定し、建物タイプ、運営、地域の支援体制について調査している。田中らは街角の居場所の事例として「親子の談話室・とぼす」を取り上げ、「場所の主（あるじ）」の活動履歴を通してその開設プロセスを詳細に検討し^{注6)}、また場所（の運営）を成立させようとする営みを「しつらえ」と呼び、コミュニティ・カフェ「ひがしまち街角広場」について、スタッフによる日々のし

つらえの実践が、柔軟な運営のしくみを充実させていくプロセスを明らかにしている^{注7)}。

一方、「まちの居場所」の形成に地域環境がいかに寄与したかを検討するアプローチもある。松原ら^{注8)}は大阪府ふれあいリビング事業により設置された「交流の場所」を対象に、地域の社会組織や支援団体が連携するしくみについて調査し、小松ら^{注9)}は愛知・岐阜・三重の 3 県における「交流の場」について運営と地域支援との関係を明らかにしている。さらに最近の成果では、日本建築学会環境行動研究小委員会の取りまとめた「まちの居場所」^{注10)}があり、運営の中心人物には団地の自治会長や PTA として活動してきた経験があり、その時の人的ネットワークを「居場所の運営に活用している」こと、さらに、「まちの居場所とは、単に心地よいサービスを提供する機能的施設ではなく、過去の地域の記憶を継承しつつ、新たな文化的知を創造する役割を担う」ことが述べられている。本研究も同様の立場に立ち、「まちの居場所」とは地域の一部であり、居場所の形成はすなわち地域の社会組織や住環境運営の形成と一体であるとの仮説をここに提示する。

本研究はこの仮説を実証するため、「ひがしまち街角広場」(以下、街角広場と略す)を含む新千里東町(以下、東町と略す)をケーススタディとし、地域全体における住環境運営^{注11)}のしくみの形成プ

* 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻
准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Division of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.

ロセスを詳細に記述しながら「地域文脈」の解読を行い、街角広場が形成された原理と役割を「地域文脈」の中に位置づけていくことが本研究の目的である。

なお、「地域文脈」とは、建築・都市にかかわる計画系・歴史系の分野で使われる用語であるが、用語の意味や概念そのものを扱った研究は極めて少なく、その定義は明確に定まっていない。田村ら⁷⁾は、「地域の文脈」は①コミュニティ、②まちづくり資源、③まちづくり課題・目標、④まちづくり計画情報、及びその集合で構成される」とし、阪神淡路大震災の被災地を対象に、震災前のまちづくりと震災後の復興土地区画整理の策定経過や内容を比較し、震災前後において4要素がどのような仕方で再認識され、再組織化されているかを分析している。また、「地域の文脈の継承」とは4要素が「発展」的に受け継がれていくことであるとしており、「資源」や「組織」そのものよりむしろ、住民によるそれらの認識の仕方、考え方の継続性を重視していると考えられる。

これを参考とし、本研究における「地域文脈」とは、新千里東町における物的環境や社会的環境の変化を「生活環境とその運営のしくみを向上させるプロセス」ととらえ、地域の人々が積み重ねてきた住環境運営の中に「継続的に」見出される、課題の解決の仕方や、課題解決のためのしくみの作り方の質を指すものとする^{注5)}。

2. 研究対象

千里ニュータウン（以下、千里NTと略す）は近隣住区理論に基づき12の住区から構成されており、街角広場は住区のひとつである新千里東町に位置する。東町は東側の団地群と、西側の中央地区センター（千里中央）からなり、両者の間に公園が配置されている。

今回主として扱うのは団地のエリアであり、大阪府営住宅、大阪府住宅供給公社、日本住宅公団（現都市再生機構）、ならびに民間に供給された計10の団地が立地している（図1、図2）。団地ごとに自治会等が組織されており、その名称は表1の通りである。また、団地エリアには小学校、幼稚園、保育所、近隣センターがあり、街角広場は近隣センターの一角に入っている。小学校の正門と向かい合っており、「もみじ橋通り」の起点に位置している。

街角広場は12人程のボランティアによって、月曜から土曜日の11時から16時まで、毎日2～3人ずつ交替で運営されている²⁾。コーヒー、紅茶などの飲み物が「お気持ち料」100円で提供されており、高齢者や子ども連れの母親など、1日に平均で30～40人の人々が訪れる。また、平日・土曜日の夜や日曜日・祝日には地域の各種団体やグループの会合場所としても利用されている。

街角広場は「憩いの場」、「交流の場」として知られるだけでなく、張ら⁸⁾によれば「自己表現の場所」であり、松原ら⁹⁾によれば、用事がなくてもふらっと立ち寄れる場所、「地域デビュー」の場所、子どもと大人との「自然な」交流の場所である。また、田中ら¹⁰⁾によれば、「地域とつながりをもって運営」することが意識され、「そこらへんにおる人」が勝手に運営側の役割をしてくれるなど、運営のしくみ自体が地域に開かれていることが指摘されている。

3. 研究の方法

3-1. 住環境運営のしくみの捉え方

本研究では住環境運営のしくみの形成をいかに捉え、記述するか

表1 団地一覧

団地名称	供給主体		本論における略称	
			団地	自治会(*3)
深谷第一住宅	大阪府住宅供給公社	分譲	第一住宅	第一自治会、一自
深谷第二住宅(*1)	大阪府住宅供給公社	分譲	第二住宅	第二自治会、二自
〈ジオマン新千里東町〉	〈居住者による建替え〉		〈ジオマン〉	〈ジ自〉
深谷第三住宅	大阪府住宅供給公社	分譲	第三住宅	第三自治会、三自
新千里桜ヶ丘団地	大阪府住宅供給公社	分譲	桜ヶ丘団地	桜ヶ丘自治会、桜自
新千里東町住宅	大阪府住宅供給公社	賃貸	東町住宅	東町自治会
メゾン千里	(民間)	分譲	メゾン	メゾン連合、各メ自(*4)
新千里東町団地	日本住宅公団(*2)	賃貸	公団団地	公団自治会、公団自
新千里東町住宅	大阪府	賃貸	府営住宅	府営自治会、府自
東丘住宅団地	大阪府住宅供給公社	分譲	東丘団地	東丘自治会、丘自
あかしや住宅団地	大阪府住宅供給公社	分譲	あかしや	あかしや自治会、あ自

- *1：2003年に建替えが完了し、名称が「ジオメゾン新千里東町」に変わる。
*2：現・都市再生機構（UR）
*3：分譲住宅では管理組合と自治会が同一であり、建替えられたマンションでは別々に組織される。公団団地以外の団地では入居者は自動的に自治会に入会する。
*4：メゾンは棟ごとに建設された時期が異なり、棟別に自治会（管理組合）がある。後から5棟を代表する組織として「メゾン千里連合自治会」が組織された。棟別の自治会を「各メ自」、5棟の連合自治会を「メゾン連合」と略記する。

図2 近隣センター配置図

が肝要であり、既往研究を参考にしながら研究の方法論を検討する。深見ら¹¹⁾は、施設管理、清掃、慶弔規定などに関する住環境運営ルール形成は、「住環境課題解決」の蓄積により形成されることを明らかにしており、本研究も住環境の課題解決のための行為（以下、課題解決行為または解決行為と表記する）に注目することとした。また、直田¹²⁾は、街角広場が実現された原因として、キーパーソン

の地域に根付いた活動が住民や行政の信頼を集め、長年にわたって蓄積されてきたことの可能性を指摘している。本研究では、直田の見解を参考としながら、課題解決の際に生じる人・組織の關係に重点を置き、依頼や協同などの關係を収集することによって社會關係の蓄積を客觀的に記述することとした。

なお、街角広場に直接關係があるか否かにかかわらず、東町でキーパーソンがかかわり、あるいは知っている全ての解決行為を追うことにより、①東町全体における住環境運営の地域文脈を解説すること、そして、②街角広場の成立を地域文脈に位置づけること、さらに、③街角広場成立後の3年間も同様の調査を行い、街角広場の成立自体が住環境運営にもたらす効果を検証することも本研究の特色である。

3-2. 課題解決行為とキーパーソンの定義

課題解決行為を収集するため、その行為を通して「組織」、「施設」、「ルール」、「行事」が生成された事例を網羅的に聞き出すこととした。ここで、「施設」は建物、外部空間、緑などの物的環境を指し、施設の新設のみならず、改善・改修された事例も含める。「ルール」は、組織・行事等の運営のしくみ、施設等の維持管理のしくみなど広義に定義し、防犯の見回りや総合学習の運営などもこれに含めることとした。また、課題解決までいらない（未解決の）場合でも、組織、施設、ルール、行事を生成するために、何らかの協力や依頼關係が生じたものは研究対象として記録した。

調査方法として、キーパーソンに対するヒヤリングを採用した。田口ら¹³⁾によれば、キーパーソンとは「住民同士や各グループ、組織のメンバーを結びつけている人々」であり、①複数の組織に所属

表2 ヒヤリング対象者

	調査時の立場（2004年）	住環境運営の経歴	居住年
A	①豊中市市議会委員	①連協会長、②公団自治会事務局長、 ③同会長、④八中PTA会長、⑤コミ委員長、 ⑥分館運営委員	31年
B	①公団自治会事務	①公団自治会、②小学校PTA役員	31年
C	①分館館長、②街角広場代表、③コミ委員長	①小学校PTA役員、②八中PTA役員、 ③健育会長、	34年
D	①防犯、②コミ委員長*	①分館長、②府営自治会会長	20年
E	①民生委員地区長	①公団自治会事務	31年
F	①社協会長、②コミ委員長		38年
G	①小学校PTA会長	①公民分館副館長、②健育委員	15年
H	①連協会長、②コミ委員長	①ジオメゾン自治会長	36年

表3 ヒヤリングの内容

*コミ委は連協・分館・社協・防犯の代表で構成され、委員長は毎年交代する。

場所・団体	組織	施設	ルール	行事
各団地	自治会、老人会、 建替え委員会など組織の設立状況と活動内容	住棟の建替え・増築、外部空間の改善・整備の履歴	住棟共用部、外部空間、駐車場の維持管理のしくみ	行事の立ち上げ・継続と運営内容
近隣センター	東町会館、街角広場など入居組織と活動内容	改善・整備の履歴	利用、維持管理のしくみ	行事の立ち上げ・継続と運営内容
学校、幼稚園、保育所	PTAの活動内容、行事にかかわる組織の概要	改善・整備の履歴	学校開放、維持管理・清掃協力のしくみ	行事の立ち上げ・継続と運営内容
街路、公園	維持管理、行事などにかかわる組織概要	改善・整備の履歴	維持管理・清掃協力のしくみ	行事の立ち上げ・継続と運営内容
自治会、各種団体	団体ごとの組織概要と活動内容	活動拠点の状況	防犯見回り、新聞発行など運営・活動の分担	行事の立ち上げ・継続と運営内容
地域全体	—	—	地域全体にかかわる清掃活動・行事などの立ち上げ・継続の状況、運営内容	
すべての課題解決行為について、①発意主体、②実行主体、③発意の時期、④解決の時期をたずねる。				

して組織どうしをつなぐ、②地域のほとんどの行事等に参加し、その人の「役割」を通して人どうしをつなぐ、③組織の代表として、他組織の代表同士とのネットワークを持つという3つの特徴のいずれかを持つと定義している。本研究ではこれを参考としながら、a. 複数の組織に所属している（所属した経験がある）、b. 組織の代表や役員として活動している、に加えて、c. 新しい組織や行事などを生み出す中心人物であると定義し、活動のタイプや組織のバランス等も考慮して8名のキーパーソンを選定した（表2）。いずれも東町の居住者であり、調査時の立場は各種団体の役員、PTA役員、市議員などである。

3-3. ヒヤリング調査の方法

表3に示す通り、ヒヤリング項目を場所・団体ごと、（課題解決行為により生成された）組織・施設・ルール・行事ごとに設定し、事例を網羅できるよう考慮した。また、キーパーソン自身が関与した行為だけでなく、他者が関与した行為についても知っている限り聞き取り、キーパーソンの記憶が曖昧な事柄については、当該関係者に直接たずね、情報の精度をあげることとした。

なお、課題解決行為を次の二つの段階に分けた。一つは「課題を認識し、これを解決しようと発意する」段階（認識・発意段階）、もう一つは「解決のための方策を立てて実行する」段階（実行段階）である。前者の段階にかかわる主体を「発意主体」、後者を「実行主体」と呼ぶこととする^{注6)}。ヒヤリングでは各行為について発意主体と実行主体の特定もしてもらった。

調査は2004年10月から2005年1月に実施した。また、2010年9月から12月にかけてキーパーソンに対する二次調査を行い、図4のダイアグラム（4-4に後述）を見せながら、①小学校と社協・分館の協力の頻度が多い理由、②連協・分館・社協・防犯の協力の頻度が多い理由、③その他、頻度の高い關係が生じた理由、④キーパーソンや街角広場に蓄積された住環境運営のノウハウの（次世代への）受け継ぎなどについてたずねた。ここで、連協、分館などは組織名の略称であり、以後組織名称については表4に示す略称を用いる。

3-4. 時期の分類

街角広場が開設されるまでの住環境運営のしくみの形成プロセスと、開設後に街角広場が住環境運営に及ぼす影響を検討するため、東町での入居が開始された1966年から、街角広場開設後3年が経過した2004年までの39年間を研究対象とし、約10年の間隔でⅠ期（1966-1974年）、Ⅱ期（1975-1984年）、Ⅲ期（1985-1994年）、Ⅳ期（1995-2004年）に分割した。インタビューの結果、行為数がⅣ期で突出して多くなったため、Ⅳ期をさらにⅣ-1、Ⅳ-2、Ⅳ-3期の3つに区分した。Ⅳ-3期は街角広場開設後の3年間に相当する。

表4 組織等の略称

組織等の名称	略称
豊中市	市
大阪府	府
日本住宅公団(現都市再生機構)	公団*、公
大阪府住宅供給公社	公社*
豊中市立第八中学校	八中*
豊中市立東丘小学校	小学校、小
自治会(全ての自治会)	自(全自)
各種団体(全ての団体)	団体(全団体)
新千里東町自治会連絡協議会	連協*、連
東丘公民分館	分館*
豊中地域防犯協会東丘支部	防犯*
東丘校区社会福祉協議会会長	社協*、社
民生委員	民生*、民
新千里東町商店会	商店会
千里中央センター地区振興協議会	中央協議会
八中校区青少年健全育成会	健育*
歩いて暮らせる街づくり構想調査検討委員会	調査検討委
東丘コミュニティルーム運営委員会	コミ委
エルダー東町	エルダー
ダイエース&マミーズの会	ダイエース
ひがしまち街角広場	街角広場*、街角
千里竹の会	竹の会*
新千里東町商店会理事長	商店会理事長、商
千里中央センター地区振興協議会会長	中央協議会会長、中長

*は地域で使用されている略称を指す。

図3 課題解決行為の分布

表4 課題解決行為の類型 〈 〉 内の数字は表5-1、5-2の事例番号を指す

行為のタイプ	行為の定義	行為の事例
自立型	住環境の課題を発見・認識した組織またはキーパーソンが、他の組織等の助けを借りずに自ら課題を解決するタイプ	団地自治会が、団地の住民のために老人会<35>や行事<23>を立ち上げる
提供型	組織またはキーパーソンが他の組織の住環境課題を認識し、解決するタイプ。 行政・供給主体が施設や組織を整備する場合も、このタイプに含める。	キーパーソンが団地住民のために行事を立ち上げる<106>。豊中市が東町に公民館を設立する<13>。
依頼型	住環境の課題を発見・認識した組織またはキーパーソンが、自ら課題を解決できないので、他の組織に働きかけて解決してもらうタイプ	団地自治会が供給主体に施設の改善を依頼する<43>。豊中市が防犯に夜警を依頼する<29>。
参加型	住環境の課題を発見・認識した組織またはキーパーソンが、自ら課題を解決できないので、自分たちの必要とする活動を既にに行っている組織等を発見し、これに参加するタイプ	地域貢献をしたいと思っていた老人会の人々が、地域の清掃活動のことを知り、これに参加する<99>
よびかけ型	◎ 住環境の課題を発見・認識した組織またはキーパーソンが、他の組織等に働きかけて協力し、課題を解決するタイプ	小学校の働きかけにより、諸団体と小学校が協力して総合学習を準備する<77>
協同型	◎ 複数の組織やキーパーソンが協力して住環境の課題を発見・認識し、課題を解決するタイプ	複数の自治会が、団地全体を統合する連合自治会を設立する<30>
ひきうけ型	住環境の課題を発見・認識した組織に対し、他の組織またはキーパーソンが働きかけ、代わりに課題を解決するタイプ	力仕事のできる人材が足りないことをダディーズが知り、引き受ける<98>
連続型	◎ 協同・提供連続型	複数の組織やキーパーソンが協力して他の組織等の課題を発見・認識し、解決するタイプ。 複数の組織等が協力して新たな組織を立ち上げる場合もこのタイプに含める。
	◎ 協同・依頼連続型	複数の組織やキーパーソンが協力して住環境の課題を発見・認識し、自ら課題を解決できないので、他の組織に働きかけて解決してもらうタイプ
	◎ 協同・よびかけ連続型	複数の組織やキーパーソンが協力して住環境の課題を発見・認識し、課題を解決するために、さらに他の組織等に働きかけて協力するタイプ
	◎ ひきうけ・協同連続型	住環境の課題を発見・認識した組織に対し、複数の(他の)組織やキーパーソンが協力して働きかけ、代わりに課題を解決するタイプ
	◎ 提供・協同連続型	住環境課題の解決のため提供された施設等を、複数の組織やキーパーソンが協力して活用するタイプ

◎は対等な協力関係をともなう課題解決行為を指す。

4. 調査結果

4-1. 調査結果の概要

ヒヤリング調査により108の課題解決行為を得ることができた。これを地図上にプロットすると図3の通りとなる。場所別では小学校(19件)、公団団地(18件)、近隣センター(14件)の順に多くみられた。行事を生成する行為は小学校9件(うちグラウンド3件)、公団4件と多いが、組織、施設、ルールについては特段の偏りはなく、幅広く分布している。

次に全行為を表5-1、5-2に整理した。課題解決行為の内容を、認識・発意段階と実行段階に分けて記し、発意主体と実行主体を右方に整理した。ただし、紙面の都合から、I期、II期、III期、IV-1期については認識・発意段階の内容を省略した。なお、発意主体と実行主体は、複数のキーパーソンや組織が複合する場合があり、これらは全て同一欄に列記した。ただし、決められたことを請け負うだけの主体(例えば募集により集まってきたボランティア)は取り上げないこととした。

4-2. 課題解決行為の連鎖

ある課題を解決した場合、そこで生成されたしくみや行事がまた新たな課題を生み出す場合がある。例えば、公団団地で違法駐車をパトロールするしくみを任意に作ったが、それを継続していくしくみが新たに必要になり自治会を組織したという事例である。これらの関係を連鎖と呼び、表中において「◆」の記号を表記し、添え字の数字が同じものが連鎖の関係にあることを示した。

4-3. 課題解決行為の分類

発意主体と実行主体の関係により、課題解決の行為を基本型7タイプ、複合型5タイプに分類した(表4)。分類に当たり、複数の組織間に対等な協力関係があるか、一方的に任せる(引き受ける)かに留意した。対等な協力があるタイプとして、複数の組織が認識・発意段階から対等に協力し解決にいたる場合を「協同型」とし、他の組織に協力を要請し共に実行に当たる場合を「よびかけ型」とした。一方、対等な協力がないタイプでは、課題を認識した組織またはキーパーソン(以下、組織等と略す場合がある)が、その課題を解決するために他の組織等に実行をまかせる場合を「依頼型」とした。

4-4. 課題解決行為の構造化

組織と解決行為をプロットし、住環境の運営のしくみを表現するためのダイアグラムを作成する。図4右上に示すように、組織等が運営にかかわるエリアを、団地、住区(小学校区)、中学校区、ニュータウン、広域のように広さの段階で分類し、下段から上段にかけて広がるよう設定した。また、学校、近隣センターなどの公共・共用施設を運営する主体については、幼稚園、小学校などの学校関連を右側に、商店会や東町会館などの近隣センター関連を左側に分けて配置した^{注7)}。図中の網掛けで示す領域は、行政・公的機関、地縁的な団地自治会、学校、商店会等との間に位置するものであり、ここにプロットされる組織を「中間組織」と呼ぶこととした。

解決行為のタイプは組織等の間を線で結ぶことにより表現する。対等な協力がある行為は二重線で表し、対等な協力がない提供、依頼、参加、ひきうけの4タイプは単線で表記し

た。以下(1)～(6)に、表 5-1、5-2、図 4 から読み取れる各時期の特徴を整理する。なお、以下の〈 〉内の数字は表 5-1、5-2 の事例番号を指し、《二》を付したものは二次調査でキーパーソンから聞き取った内容を指す。

(1)Ⅰ期：施設の生成が 15 例あり、これらは 1966 年の大阪府営住宅団地の開発を皮切りに、住宅団地、学校、近隣センターなどがニュータウン開発の一環として整備されたものである。組織の生成は 16 例あり、このうち 9 例が団地の自治会である。また、地域住民の文化や教育の「増進」を支援するために「公民分館」が設立された(13)。1969 年以降になると、盆踊りや体育祭などの行事が自立型により生成されている。Ⅰ期とは、行政等による施設・組織の提供と、新たな組織による行事の立ち上げの時期であると言える。

(2)Ⅱ期：ルール生成が多く見られ、駐車場の管理(21・34)、夜警(29)の他、高齢者への配食(31・32)など福祉に関するしくみも立ち上がっている。当初公団に自治会はなかったが、違法駐車への対策を行い(21)、これを組織的に継続するために連鎖的に自治会が設立されている(22)。行事の立ち上げも 4 事例と多く、うち 3 事例は公団自治会による自立型の生成である。東町には元々連合自治会のような地域全体を統括する組織や機会がなく、地域自ら、全自治会・諸団体が集まる機会を設けたこともⅡ期の特徴である(20)。図 4 より、新しくできた社協と防犯が、行政と自治会との中間的な位置で行政からの依頼を受けていることがわかる(29・31)。

(3)Ⅲ期：Ⅲ期では団地の建替え・増築に関する検討が 8 事例あり、その内 2 事例は検討の結果断念され(40・44)、6 事例はⅣ期まで検討が継続されている。組織については、全自治会・各種団体の協同により連協が設立されている。連協は東町全体の調整や窓口を受け持つ初めての組織であり、Ⅱ期に始められた新春交歓会(20)の取り組みが結実したと言える。また、豊中市の方針により健育が設立された(35)。その後、小学生が環境学習として通学路を清掃する取り組み(51)が始められており、「学校教育を地域と一体となつて支えよう」とする健育の方針が成果となって表れている。Cは健育の設立当初から会長代行として企画・運営に携わっており、同時に小学校の PTA 会長を務めていたことから、健育の方針が小学校に反映されやすかった点も重要である《二》。図 4 から、中間組織として社協、防犯、連協、分館という 4 つの基本的な団体が揃ったこと、Ⅱ期から継続して公団自治会の活動が活発なこと、大半の団地にもようやく自立型の行為が生成したこと、小学校に初めて解決行為(清掃による環境学習)が生成したことがⅢ期の特徴である。

(4)Ⅳ-1 期：行事では、4 事例のうち 3 事例が小学校と地域の連携によるものである。図 4 より、小学校と社協との関係がより強くなっていることがわかる。また、公団自治会の活動が、自治会や公団との関係以外に、豊中市へと延びていることがわかる。小学校余裕教室の活用に関する依頼であり(55)、A が公団団地を超えて、地域の住環境運営に積極的ににかかわり始める転機であると言える。

表 5-1 課題解決行為の分析(Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ-1 期)

期間	番号	年	場所	課題解決行為(実行段階)	働きかけ	行為の主体	期間	番号	年	場所	課題解決行為(実行段階)	働きかけ	行為の主体
					発見	実行						発見	実行
Ⅰ (16事例)	1	1966	府営住宅	団地建設、自治会設立	提	大阪府	Ⅲ (17事例)	35	1985	(地域)	八中校区青少年健全育成会の設立	提	豊中市
	2	1966	第一・第二	団地建設、自治会(管理組合)設立	提	公社		36	1985	東町会館	単身高齢者のために「八千代クラブ」を立ち上げ、会食やバス旅行を行う。	自	社、民
	3	1966	桜ヶ丘団地	団地建設、自治会(管理組合)設立	提	公社		37	1985	桜ヶ丘住宅	建替えの検討(意見分裂も93年に建替え決定)	自	桜自
	4	1966	東町住宅	団地建設、自治会設立	提	公社		38	1985	第一住宅	建替えの検討(2002年に計画案取りまとめ)	自	一自
	5	1966	東丘団地	団地建設、自治会(管理組合)設立	提	公社		39	1985	第二住宅	建替えの検討(2001年に計画案取りまとめ)	自	二自
	6	1966	あかしや	団地建設、自治会(管理組合)設立	提	公社		40	1985	第三住宅	建替えの検討(等価交換難し検討取り止め)	自	三自
	7	1966	八中、東丘小、幼	学校・幼稚園の開校	提	府、市		41	1985	東町住宅	公社が建替えの検討開始	提	公社
	8	1966	近隣センター	近隣センター商店組合設立	提	大阪府		42	1985	東丘団地	建替えの検討(2004年現在も検討中)	自	丘自
	9	1966	東町会館	近隣センター内に開設(300)	提	大阪府		43	1985	あかしや	建て替えの検討(2003年に計画案取りまとめ)	自	あ自
	10	1969	深谷第三	団地建設、自治会(管理組合)設立	提	公社		44	1986	公団団地	増築の検討を依頼(家賃高くなるため断念)	依	公団自
	11	1969	メゾン千里	団地建設、自治会(管理組合)設立	提	(民間)		45	1986	(地域)	◆3 全自治会・団体代表により連協を設立	協+提	全自、全団体
	12	1969	保育所	保育所の開所	提	豊中市		46	1986	幹線道路	府の提案により住民が府道吹田箕面線を清掃(連協がボランティアを募る)	依	大阪府
	13	1969	東丘小	公民分館設立	提	豊中市		47	1987	公団団地	公団が1世帯で複数戸を借りれるよう配慮	依	公団自
	14	1969	むくせい公園	三三三自治会の盆踊り	自	府自		48	1988	公団団地	◆4-1 違法駐車が解消しないため、ゲートと管理室を設置 ◆4-2	依	B 公団自、公団
	15	1969	東丘小	「東丘カーニバル」を年1回開催◆1	自	小学校		49	1989	公団団地	◆4-2 管理の負担が一部の人に集中したためボランティアによる交代制とする。	自	公団自
	16	1969	東丘小	夏休み校舎と校庭を PTA が清掃◆2	自	小学校		50	1993	緑道	通りの名称を公募し、「にほれび通り」に決定	提	豊中市
	17	1969	東丘小	市民体育祭を年1回開催	自	分館		51	1993	(地域)	4年生の環境学習として、通学路や家の周辺の清掃をする「クリーンタイム」を実施◆7	自	小学校
	18	1970	東丘小	三三三自治会の盆踊りを東町全体の盆踊り	自	連協		生成されたもの：組織3件、施設9件、ルール5件、行事0件					
	19	1971	公団団地	団地建設(自治会はなし)	提	連協		52	1995	府営住宅	1世帯当たり1台の駐車許可を2台に増やす。	提	府
生成されたもの：組織16件、施設15件、ルール1件、行事4件							Ⅳ (15事例)	53	1995	小学校	「東町もちつき大会」を年1回開催◆8	よ	小
Ⅱ (15事例)	20	1975	東町会館	全自治会・諸団体代表が集まる「新春交歓会」の立ち上げ(年1回開催)◆3	よ	会館		54	1995	小学校	低学年児童と高齢者が年1回上新田で芋ほり	よ	小
	21	1975	公団団地	駐車場設置、違法駐車のパトロール◆4-1	協+依	A、B		55	1995	小学校	小学校の余剰スペースに「コミュニティラ」の整備を提案したが、市の財政難により取りやめ。	依	A
	22	1976	公団団地	◆4-1 パトロール継続のため自治会の設立	協+依	A、B		56	1995	小学校	◆1 地域ぐるみで小学校の行事を手伝う◆5	よ	小
	23	1976	公団団地	「団地祭り」(屋台・神輿)を年1回開催◆5	自	公団自		57	1995	公団団地	老人会「エルダー東町」の立ち上げ	自	公団自
	24	1976	公団団地	棟対抗ソフトボール大会の開催◆1	自	公団自		58	1995	府営住宅	老人会「東雲会(しのめ会)」の立ち上げ	自	府自
	25	1976	千里中央	ボーリング大会の開催◆2	自	公団自		59	1995	公団団地	交流のため年1回バス旅行、ハイキングを実施	自	公団自
	26	1977	公団団地	◆5 公団以外の子どもにもお菓子を配る。	自	公団自		60	1995	公団団地	団地のグラウンドで年1回花火大会を実施	自	公団自
	27	1978	(地域)	東丘校区社会福祉協議会の創設	提	豊中市		61	1996	公団団地	毎年夏に子どもが集合所前のプールで水遊びができるよう役員が交代で水を管理する。	自	公団自
	28	1978	(地域)	豊中地域防犯協会東丘支部の創設	提	豊中市		62	1996	公団団地	公団が花壇の整備を行い、自治会が土、肥料や苗を購入し花を育てる。◆6	よ	公団自
	29	1979	(地域)	夏と歳末の夜警を行う。	依	豊中市		生成されたもの：組織2件、施設2件、ルール4件、行事4件					
	30	1980	メゾン	メゾン千里連合自治会の設立	協	各々自		* 5：児童はペットボトルや紙などでボーリングコーナーや魚釣りコーナーなどを制作し、大人や児童を招いてゲームをする。大人たちは別のブースに出し物をする。					
	31	1980	(地域)	単身高齢者の見回りを兼ねた配食サービスを開始(年2回)◆6-1◆3	依	豊中市		* 6：高齢化が進み、花壇を世話する人が減少したため、自治会からの肥料の支給は中止。					
	32	1980	(地域)	◆6-1 頻度を月1回に増やす。◆6-2	自	社、民		* 7：東町の住民が任意で1口500円、千里中央所在の企業が任意で1口5000円を豊中市に納入。					
	33	1981	府営住宅	浴室と部屋の増築(1985年まで)	提	府		* 8：正式な設立は2003年。街角広場開設後は、こてで月に1度例会を行うようになる。					
	34	1984	府営住宅	駐車場の整備(管理は自治会が行う)	よ	府自		* 9：たけのこ掘り(4月)の他に、七夕飾り(7月)、落ち葉遊び、干し柿(11月)、しめ縄づくり(12月)を実施。					

◆：添え字の数字が同じ場合、ふたつの課題解決行為は連鎖の関係にあることを示す。
KP：他住区のキーパーソンを指す。

- * 1：参加者が集まりにくくなったため、1985年に取りやめ。
- * 2：ボーリング場閉鎖とともに取りやめ。
- * 3：Cは、夫婦二人暮らしの場合も配偶者の具合が悪くなれば配食サービスが必要になるとして、(独居老人のみを対象する)豊中市の方針に反対している。
- * 4：いずれの団地も「建替え委員会」が検討・推進を担当する。

- * 5：児童はペットボトルや紙などでボーリングコーナーや魚釣りコーナーなどを制作し、大人や児童を招いてゲームをする。大人たちは別のブースに出し物をする。
- * 6：高齢化が進み、花壇を世話する人が減少したため、自治会からの肥料の支給は中止。
- * 7：東町の住民が任意で1口500円、千里中央所在の企業が任意で1口5000円を豊中市に納入。
- * 8：正式な設立は2003年。街角広場開設後は、こてで月に1度例会を行うようになる。
- * 9：たけのこ掘り(4月)の他に、七夕飾り(7月)、落ち葉遊び、干し柿(11月)、しめ縄づくり(12月)を実施。
- * 10：八中、東丘小学校、北丘小学校、アソカ幼稚園、せんりひじり幼稚園、東丘保育所とそのPTA。
- * 11：新千里北町、南町、東町、西町、上新田の連合自治会長または連協会長。Hは東町の代表。

表 5-2 課題解決行為の分析 (Ⅳ-2 期・Ⅳ-3 期)

* : 表中の凡例は表 5-1 の脚注に記載

期 間	番 号	年	場 所	課題解決行為		解 決	働きかけ の タイプ	生成したもの			行為の主体	
				認識・発意段階	実行段階			組 織	施 設	ミ ニ 行 事	発意	実行
Ⅳ-2 (23事例)	63	1999	東町会館	お年寄りどうしの交流の場をつくる。	月1回「ふれ愛サロン」で手芸、おしゃべり。保健所による健康相談もする。	○	自立型			○	社、民	社、民
	64	1999	小学校	◆2 児童や先生の数も減少し、校庭の掃除まで手がまわらない。	社協、連協、分館を中心に、普段小学校を利用しているグループが集まって清掃を手伝う。	○	よびかけ		○	小	小、社、連協、分館	
	65	1999	小学校	小学生が植えた大根を使って、地域と交流を行いたい。	大根パーティーと昔の遊びの会(お年寄りがコマやお手玉を児童に教えた後、一緒におでんを食べる)を授業の一環として実施。◆9	○	よびかけ		○	小	小、社、民、健育	
	66	1999	東町会館	単身でないお年寄りにも賛助金(*7)を還元。	65歳以上のお年寄りを対象としたバス旅行を年1回行う。	○	自立型			○	社、民	社、民
	67	1999	メゾン	高層住宅の建設により、眺望の阻害や圧迫感が生じる。	桜ヶ丘団地の建て替え計画(高層住宅)に反対運動を行う。メゾンのうち南側の住棟は影響が少ないので反対運動がまとまりにくい。	×	自立型	○			メゾン連合	メゾン連合
	68	2000	公園団地	5階建ての住棟にエレベータがない。	公園が設置を検討したが、費用がかかるため断念。	×	依頼型		○		公園自	公園
	69	2000	公園団地	(公園の方針による)	住戸内の段差解消、洋風化、間取りの変更(3DK→2LDK、2DK→1LDK)。	○	提供型		○		—	公園
	70	2000	(地域)	東町が「歩いて暮らせる街づくり構想」のモデルに選定。事業推進のため豊中市から委員会委員の推薦依頼。	連協会長、社協会長、防犯会長、分館館長、商店会理事長などが委員として選定。◆10	○	よびかけ	○			市	A、C、D、F商、中長、市
	71	2000	小学校、街角広場	東丘カーニバルでの父親の出し物を契機にイベントの手伝いをするようになり、地域との交流を深めたいと感じていた。	「ダディースアンドミズ」の会設立。1学期に1度小学生対象のイベントを企画(カレー、バーベキューなど)。◆11*8	○	提供型	○		○	G、PTA役	ダディース
	72	2000	公園	むくせい公園で中学生どうしのいさかいがあり、人の背丈ほどの樹木による死角をなくするため、豊中市に伐採してもらうことになった。	豊中市が住民の苦情を恐れて樹木の伐採を躊躇したため、Cが健全育成会会長、八中ふれあい指導委員の立場で各自治会に伐採を説得してまわり、ボランティアと伐採した。	○	よびかけ		○	C	C、市	
	73	2000	(地域)	紅葉橋通りで通り魔があり対策必要。	東町全域の夜警を防犯役員中心に実施(平日毎夜9時～10頃)。	○	自立型			○	防犯	防犯
	74	2000	緑道	◆7 児童が減少してきたため、清掃のサポートが必要。	小学校のよびかけに、諸団体と多くのボランティアが参加。諸団体の枠を超えて多くの人々が当日「どこからでも」集まってくる。	○	よびかけ			○	小	社、民、分館防犯、小
	75	2001	桜ヶ丘団地	「住民の輪を広げる」必要性がある。	「おしゃべりサロン」を団地内の集会所に立ち上げる。	○	自立型			○	桜自	桜自
	76	2001	メゾン	集中給湯冷暖房のため管理費が高すぎる。	委託先の管理会社と交渉し、下げることができた。	○	依頼型		○		自治会長	管理会社
	77	2001	小学校	◆9 総合学習をさらに充実させたい。	小学校が連協に、総合学習の講師として地域の人の紹介を依頼し、社協、民生委員なども協力してリストを作成。	○	よびかけ		○		小	連協、社、民、小
	78	2001	小学校	個人宅が各種団体の事務所代わりになっているため、新しい活動拠点が必要。	小学校の余裕教室を活動拠点に貸してもらえないか市と1年にわたって交渉。3室を「コミュニティルーム」に改装し地域に開放。◆12	○	協+依		○		A、C、D、F	市
	79	2001	小学校	◆12 運営組織や鍵の管理が必要。	東丘コミュニティルーム運営委員会を設立し、鍵の管理と清掃を行う。	○	協+提	○	○		A、C、D、F	コミ委
	80	2001	小学校	主要4団体がそれぞれ年2回新聞を発行していたが、経費上発行頻度を増やせない。	新聞「ひがしおか」に統合し、コミ委が2ヶ月に1回まで頻度を上げて発行する。印刷機、紙折り機、パソコンを購入。	○	協+提		○		A、C、D、F	コミ委
	81	2001	緑道	(大阪府警の方針：歩いて暮らせる街づくり構想の実績が評価された)	大阪府警がスーパー防犯灯の設置を提案。設置位置はA、C、D、Fを中心に、各自治会・諸団体関係者にも集まってもらい現場で決めた。	○	提+協		○		府警	府警、A、C、D、F
	82	2001	小学校	池田小事件の直後、小学校校長よりCに、どのようにして学校を守ればよいかわからないと相談があった。	「地域の人が出入するから学校の安全が保たれる」と考え、120本のたすきを急遽作成し、諸団体とPTAIに配布した(たすきをかけている人は学校に自由に入出できるというルールを提案し了承された)。	○	依頼型		○		小学校	C
	83	2001	近隣センター	◆10 報告書だけの事業にしたいくない。近隣センターの衰退や高齢化を扱う社会実験に取り組む。	近隣センターの空き店舗を改装し、お年寄りを初めとして誰もが立ち寄れる「ひがしまち街角広場」を開設。◆13	○	協+よ		○		A、C	A、C、D、F、商、市
	84	2001	街角広場	◆13 運営スタッフが必要だが、自治会ごとに人選してもらい(名簿に名前を書いてもらう)方式では人が集まらない。	A、Cの知り合いを中心に、任意に声をかけてボランティアを集める。	○	ひ+協	○			街角	A、C
	85	2001	街角広場	◆12 コミュニティルームの鍵の管理場所が必要。	街角広場が鍵を管理する。	○	依頼型		○		コミ委	街角
86	2002	公園	千里東町公園に公衆便所設置の要望がある。	下水道工事の必要があり、コストが高いため設置できない。	×	依頼型		○		C	豊中市	
87	2002	街角広場	桜ヶ丘団地の住民にたけのこ掘りの行事をしたいとの要望があるが、団地では準備がなかなか進まない。	街角広場の主催でたけのこ掘りを実施。これがきっかけで季節ごとに行事を行うようになる。*9	○	ひきうけ			○	桜自	街角	
88	2002	小学校	◆8 高齢化でちのつき手がない。	手伝いを募り、街角広場を初め、多くのボランティアが手伝いに参加。	○	協+依			○	小、社	街角	
89	2002	(地域)	池田小事件(2001年)を契機に、児童の登下校時の見守りを組織的に行う必要性が認識される。	地域的な見守りの提案がされるが、どの組織が主体になるべきかわからない。意見の整理ができない。	×	よびかけ		○		防犯	健育、防犯	
90	2002	小学校	児童数が減少したため、小学校の運動会がさびしい。	1995年頃から市民体育祭と小学校の運動会を合同で開催することを小学校に提案し続け、ようやく「ふれあい運動会」として実現。	○	よびかけ			○	C	小、C	
91	2002	幹線道路	府が、アドプトロードのモデルとして府道箕面吹田線の1回1回の清掃を月1回に増やせないか打診。	は多すぎるなどの意見が出て断念。◆14	×	依頼型			○	大阪府	連協	
92	2002	緑道	◆14 コミ委が「独断でやろう」ということになり、府道の代わりに、生活道路の清掃をすることで意見がまとまった。	こぼれび通りと紅葉橋通りを豊中市からアドプトロードに指定してもらい、月1回の清掃活動を行う(コミ委が代表となり市へ指定の申請をした)。清掃は連協関係者を主体に100～50名程度が参加してくれる。	○	協+よ		○		コミ委 A、C、D、F	連、コミ委、A、C、D、F	
93	2003	東町会館	子育て相談や情報交換の場をつくる。	「子育てサロンつくしんぼ」を月1回開催。保健士を呼ぶこともある。	○	自立型	○				社、民	社、民
94	2003	東町公園	七夕祭りの笹を採るため、街角広場の有志で公園の竹林に入り、荒れた竹林を発見。自ら管理することを決意。	豊中市から間伐の許可を得る(別の公園も薦められ、桃山公園、東町公園の間伐を開始)。◆15	○	協+依		○		KP、A、街角	豊中市、吹田市	
95	2003	街角広場	◆15 間伐により木材の活用。	街角広場で、竹を使ったイベント(七夕や竹製のお神輿)の実施。	○	よびかけ			○	KP、A、小、街角、KP		
96	2003	—	◆15 地域や市と連携したい。	「千里竹の会」の設立。「公園等愛護会」として登録。	○	自立型	○			KP	竹の会	
97	2003	八中	新千里東町と新千里北町の交流の機会が必要。	八中体育館で健育主催のスポーツ大会(バドミントン)を毎年開催。東町・北町の学校、幼稚園などに直接お願いしてまわり、参加者が集まった。	○	協+よ			○	C、G	C、G、各小学校等*10	
98	2003	(地域)	◆11 児童数の減少や高齢化により、PTAや諸団体の人材が不足し、負担が大きくなる。	PTAの行事や地域のイベント(特に力仕事)を手伝うようになり、「地域の信頼を得る」までに。◆16	○	ひきうけ			○	健育、分館	ダディース	
99	2003	緑道	高齢者のグループも地域に貢献したい。	「エルダー東町」の人も毎月参加。	○	参加型		○		エルダー	エルダー	
100	2003	保育所	保育所の迎えの車が路上駐車するため危険。	保育所で車をUターンするスペースを作った。	○	依頼型		○		C	市	
101	2004	ジオメゾン	第二住宅建て替え後、地域とのパイプ役となり、団地内の交流を促す組織が必要。	管理組合の役員を中心に自治会の規約づくりを行い、住民説明を経てジオメゾン自治会の設立。◆16	○	依頼型	○			A	H	
102	2004	公園団地	団地内の居住者の交流をはかる。	団地集会所で「公園ふれあいサロン」の立ち上げ。	○	自立型			○	公園自	公園自	
103	2004	千里中央	千里中央駅周辺の再整備に住民の意見を反映させたい。	意見反映のしくみについて市と相談を始める。◆17	○	協+依		○		KP、A	市	
104	2004	(地域)	豊中市で下校時の見守りが検討されているが、昼間は地域の目が行き届いているので心配ない。両親が働いている児童を放課後預かる「めだか学級」の下校が心配。	豊中市の事業「児童見守り隊」では、めだか学級の下校時までサポートできない。地域でどのように対応するか検討を継続。	—	よびかけ		○		C	D、防犯	
105	2004	(地域)	◆6-2 配食サービスの回数を週1回程度に増やしたいが、東町会館の厨房は使い勝手が悪い。	社協会長が給食センターを配食サービスに利用する要望を提出し、豊中市が検討を始める。	—	依頼型		○		F	市	
106	2004	ジオメゾン	◆16 新住民と旧住民の融和、お年寄りの交流の場をつくる。	自治会役員がコーラスの先生に頼んで「童謡と唱歌を歌う会」を集会所で毎月開催する。	○	提供型			○	H	ジ自	
107	2004	ジオメゾン	◆16 新住民と旧住民の融和と、50～60才代の居住者の交流の場をつくる。	自治会役員と有志で「フォークソングを歌ってしゃべろう会」を集会所にて開催。定期的な開催を検討している。	○	自立型			○	ジ自	ジ自	
108	2004	千里中央	◆17 住民の意見をまとめ、行政に反映しやすくするための組織が必要。	新千里東町・西町・北町・南町・上新田の代表者が参加するNPO組織の立ち上げを調整中している。*10	—	よびかけ	○			KP	各住区代表*11

図4 課題解決行為の構造化

(5)IV-2 期:組織では、歩いて暮らせる街づくり構想調査検討委員会への委員の派遣〈70〉があり、A・C・D・F、商店会理事長、中央協議会会長の6名が地域から選定された^{註8)}。これ以降、A・C・D・Fが協力する機会が増え、小学校の余裕教室の開放(コミュニティールーム)〈78〉とこれを運営するコミ委の設立〈79〉、コミ委による地域の新聞の統合〈80〉などが生じている。街角広場は調査検討委において、「報告書だけの事業にしたいくない」というA・C・D・Fからの強い要望により社会実験として実現した〈83〉。ただし、街角広場については4名の中でもAとCの果たした役割は際立っており、「お年寄りを初めとして、誰もが気軽に立ち寄れる場」を設けるという発想は、二人がこれまでの「長年にわたる活動を通して温めてきた」《二》ものであり、ボランティアのスタッフが継続的に集まるようになった〈84〉のも、A・Cのそれぞれが、「地域活動を通して築いてきた信頼関係」《二》に基づいているためである。

施設とルール生成については、防犯〈72・73・81・82〉、総合学習〈77〉、団地(住棟)の改善〈69・76〉に関するものなど多岐にわたる。防犯に関しては、この時期に地元や池田小学校での事件が重なったため、公園の樹木の伐採〈72〉、スーパー防犯灯の整備〈81〉、夜警〈73〉、小学校訪問者のためのたすきの配布〈82〉がみられる。

図4では、二重線で表した対等の協力を伴う行為(協同型とよびかけ型)が多くなっていることがわかる。A・C・D・Fが協力するものと、小学校・社協が協力するものがある。後者については、大根パーティーと昔の遊びの会〈65〉、環境学習(地域の清掃)の応援〈74〉、総合学習への協力〈77〉などであり、高齢者を児童の教育に生かそうとする意図が読み取れる。

(6)IV-3 期:組織については、子育て支援〈93〉、竹の会の設立〈96〉、団地建て替え後の自治会設立〈101〉、千里中央地区再整備に市民の意見を伝えるためのNPO設立〈108〉があり、竹の会とNPOでは住区や中学校区を超えた関係が構築されている。

ルールについては、こぼれび通りともみじ橋通りがアドブロードとなり、地域全体の協力による清掃のしくみが立ちあがった点が注目される〈92〉。元々は大阪府が幹線道路をアドブロードとするよう東町に持ちかけてきたものであり、この時は自動車の通行量が多いため断っているが〈91〉、アドブロードというアイデアは地域に実現したいと考え、A・C・D・F(コミ委)が歩行者専用道を豊中市に申請し直した。ボランティアの参加も多く、老人会も後から加わるなど〈99〉、地域の人や組織を結びつける重要な機会となった。

行事については、街角広場、竹の会、ダディーズがそれぞれ重要な役割を果たしている。街角広場は、桜ヶ丘団地でなかなか実現できなかった「たけのこ掘り」の行事を引き受け、近くの竹林にたけのこを採りに行くだけでなく、街角広場に持ち帰って調理し、皆で食べるという行事に仕立て上げた〈87〉。これがきっかけとなり、七夕祭りなど計5つの行事が毎年行われることとなった。

一方、竹の会の設立は、この七夕祭りの笹を採るために有志が街角広場に集まったことに端を発する〈94〉。街角広場から東町公園の竹林に出かけ、そこが荒れ放題になっていることを発見し、豊中市の許可を得た上で間伐を開始した。間伐で生じた廃材は、街角広場でのイベントにも活用された〈95〉。行政のアドバイスも受けながら、最終的には、東町公園にとどまらず、千里全体の竹林の維持管理を目指す公園等愛護会として登録された。また、ダディーズは、

PTAや地域のイベントの力仕事を自ら引き受けることにより、「地域の信頼を得る、無くてはならない組織」《二》となった〈98〉。

図4より、対等の協力をともなう協同型、よびかけ型などの関係は、A・C・D・Fと小学校・社協以外にも、街角広場、竹の会、ダディーズを介して多様に形成されていることがわかる。

この時期は、ひきうけ型が多いことも特徴であり、街角広場とダディーズが他の組織の課題を引き受けて解決している。特にダディーズは、健育と分館がかかわる行事の力仕事を引き受けており、地域から信頼関係を獲得していることを裏付けている《二》。

5. 地域文脈における街角広場の形成過程と役割の位置づけ

(1)地域文脈の考察:以上の分析をもとに、東町全体における課題解決の継続的な特徴、つまり住環境運営の地域文脈についてまとめる。

地域文脈の一つは、「よびかけ型」、「協同型」という対等な協力によって課題解決が継続されてきた点である。街開き当初は行政・公的機関からの「提供型」の解決行為が主体であったが、Ⅱ期以降から対等な協力が徐々に増え始め、Ⅳ-2期以降には、A・C・D・Fの協力や、小学校と社協の協力など、一定の協力関係が定着してきている。また、街角広場や竹の会を経由して、東町エリアを越えた広域の(対等な協力関係の)ネットワークが生まれている。

もう一つは、「中間組織」をつくりながら新たな課題に対応してきた点である。Ⅰ期の分館からⅢ期の健育までは行政が設立したものであるが、担当者には東町のキーパーソンが採用され、福祉や防犯に関する地域に根差した活動が進められた。また、Ⅲ期の連協は「初めての地域自前の組織」《二》であり、これ以降の「中間組織」は全て住民によって組織された。Ⅳ-2期に生まれたコミ委の活動(A・C・D・Fの関係)が街角広場を生み出す基盤となり、さらに街角広場が竹の会の生まれるきっかけとなるなど、「中間組織」による課題解決が新たな「中間組織」の設立を誘発してきたことも特徴である。

(2)地域文脈における街角広場の位置づけ:位置づけの考察に当たり、Aは公団団地の組織や行事の運営にかかわり、自治会の活発な活動を支えてきたこと、CはPTAと健育の中心的役割を担い、「学校教育は地域が支える」という健育の方針を、PTA活動を通して実現してきたことに留意しておく必要がある。

まず、対等な協力の文脈から見れば、Ⅳ-2期の急激な増加とⅣ-3期の広域的な広がりが特徴的であり、この変曲点に街角広場がいかにかわっているかが重要である。Ⅳ-2期で急増が見られるのは、歩いて暮らせる街づくり構想調査検討委員会にA・C・D・Fが派遣されたことをきっかけに、多岐にわたる課題が4名の対等な協力で解決されるようになったためである。街角広場の設立もその一環であるが、「やがてAとCが街角広場に残り」《二》、AとCに蓄積されてきた協力関係が街角広場に持ち込まれたことがⅣ-3期の拡大の原因になったと考えられる。

次に、「中間組織」の文脈からみれば、1999年にAが連協の会長に就任する時が転機であった。この時AはCに「共に地域を変えるため」分館館長になることを強く要請した《二》。AとCがそれぞれ「中間組織」(連協と分館)の代表となった翌年、歩いて暮らせる街づくり構想調査検討委員会委員に連協会長、分館館長として選ばれ、同委員会による社会実験として街角広場の設立(二人であたためてきたアイデア)を提案した。AとCは「お互いの活動について

いつもアイデアを出し合ってきた」間柄であり、過去の活動を通して二人を信頼する人々がボランティアとして集まり街角広場が実現に至ったのである（84）。街角広場設立後は、街角広場自体がキーパーソンや関係者の会合の場所となり、2003年には笹探りの集まりが竹の会設立のきっかけとなった。Aは竹の会設立のため、行政との交渉を支援し（94）、Cは街角広場の代表として、竹を使ったお祭りが小学校の行事となるよう関係者を調整した（95）。街角広場はダディーズの拠点にもなり、Cは街角広場に集まるダディーズのメンバーに、「自分たち（上の世代）が何をやってきたかを教え続け」（二）、ダディーズはこれをきっかけに「次の世代なりの」活動を展開している（97・98）。竹の会とダディーズによる街角広場を介した活動は、それぞれ他住区まで拡大した（94・97）。

このように、AとCがそれぞれ既存組織（団地やPTA）で培ってきた住環境運営のノウハウと信頼関係が「中間組織」（連協と分館）の運営に生かされ、さらに「中間組織」で経験されたノウハウまでもが街角広場の設立に生かされたと言える。また、街角広場での会合をきっかけとして新たな「中間組織」やその役割が生まれており、そこにA、Cそれぞれの協力があることがわかった。

街角広場は誰もが立ち寄れる交流の場となるよう設立されたものであるが、設立にかかわった人々のノウハウや信頼関係を基礎として地域の住環境運営のしくみの一部に組み込まれ、またその存在が、新たなしくみの発展に重要な役割を果たしていると言える。

参考文献

- 1) 松原茂樹、他 5 名：大阪府ふれあいリビング事業の運営と連携 住民が運営する交流の場所と地域環境の関係に関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.636、pp.347-354、2009.2
- 2) 日本建築学会編：まちの居場所、東洋書店、2010
- 3) 小松尚、他 2 名：地域住民の居場所となる交流の場の空間・運営・支援体制の状況 ー地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究その 1 ー、日本建築学会計画系論文集、No.611、pp.67-74、2007.1
- 4) 田中康裕、鈴木毅：「親と子の談話室・とぼす」の開設プロセスにみる「場の許容性」についての一考察 ー「場所の主」へのインタビューを通してー、日本建築学会計画系論文集、No.636、pp.379-386、2009.2
- 5) 田中康裕、他 4 名：日々の実践としての場所のしつらえに関する考察 ー「ひがしまち街角広場」を対象としてー、日本建築学会計画系論文集、No.620、pp.103-110、2007.10
- 6) 小松尚、他 2 名：設立者からみた交流の場の開設場所と運営および地域的つながりの相互関係 ー地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究その 2 ー、日本建築学会計画系論文集、No.620、pp.95-102、2007.10
- 7) 田村博美、土井幸平：地域の文脈の継承を意図した復興まちづくりの実践 ー西宮市旧集落森具地区震災復興土地区画整理事業の事例ー、日本都市計画学会学術研究論文集、No.34、pp.499-504、1999
- 8) 張海燕、他 4 名：新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用実態と利用者意識について ー高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究ー、日本建築学会計画系論文集、No.589、pp.25-32、2005.3
- 9) 松原茂樹、鈴木毅：計画された街に生まれた高齢者の居場所：千里ニュータウンひがしまち街角広場の試み、建築雑誌、日本建築学会、vol.118、No.1510、pp.44-45、2003.10
- 10) 田中康裕、他 4 名：コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察 ー主（あるじ）の発言の分析を通してー、日本建築学会計画系論文集、No.614、pp.113-120、2007.4
- 11) 深見かほり、他 3 名：茨城県美野里町 6 団地における居住者組織による住環境運営に関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.591、pp.17-24、2005
- 12) 直田春夫：千里ニュータウンのまちづくり活動とソーシャル・キャピタル、都市住宅学 49 号、都市住宅学会、pp.15-21、2005
- 13) 田口慎子、曾根陽子：コミュニティ形成に果たすグループ活動とキーパーソンの役割 ー1960 年代のミニ開発住宅地における近隣交流に関する

- 研究 その 3 ー、日本建築学会計画系論文集、No.648、pp.343-351、2010.2
- 14) 李威儀、鈴木毅、高橋鷹志：台北竜山寺と周辺地域における居方・コミュニケーションの質の考察 都市空間のなかの居場所に関する研究 その 1、日本建築学会計画系論文集、No.468、pp.133-141、1995.2
 - 15) エドワード・レルフ：場所の現象学、筑摩書房、1991
 - 16) 重村力、他 2 名：集落空間文脈の読み取りと評価を通じた計画方法に関する研究 ーその 1；集落空間文脈の読み取りー、日本建築学会大会学術講演梗概集、E 分冊、pp.905-906、1989
 - 17) 陣内秀信、他 2 名：チュニスの住宅に関する研究（その 1）ー都市的文脈からみた住宅の配置と構成ー、日本建築学会大会学術講演梗概集、F-2 分冊、pp.167-168、1997
 - 18) 平松知久、小林英嗣、他 3 名：文脈から見た市町村マスタープランにおける都市空間像、日本建築学会大会学術講演梗概集、F-1 分冊、pp.373-374、1998
 - 19) 秋元馨：現代建築のコンテクスチュアリズム入門、彰国社、2002

注

- 注 1) 本研究における「居場所」とは、李ら（参考文献 14）による定義を踏襲し、「自分あるいは自分たちの意志で、特別な許可も必要とせず、思い思いに一時を過ごすことのできる場所」とする。
- 注 2) 参考文献 2「居場所にみる新たな公共性」（p.180-206、橋弘志執筆）
- 注 3) 本研究における「まちの居場所」とは、①人が思い思いに過ごせる（注 1）、②人と人を結びつける、③地域との関係が成立している（人と地域を結びつける、あるいは地域から支えられている）という 3 つの条件を有する場所とする。なお、既往研究では、「居場所」（参考文献 2）、「交流の場所」（参考文献 1）、「居場所となる交流の場」（参考文献 3）など、異なる用語を用いて表現されているが、①～③の性質が言及されていれば本研究における「まちの居場所」と同義であると判断した。なお、既往研究における「居場所」、「場所」、「場」の定義は必ずしも明確にされておらず、著者ごとに異なる可能性もあるが、本論では、特定の空間の物理的性質や位置を扱う場合に「場所」を用い、人により意味づけられる心理的状態、思考、活動、経験などを扱う場合に「場」を用いて「居場所」と区別した。なお、エドワード・レルフ（参考文献 15）による“place”（人の経験により意味づけられた空間）の意味は、本論における「場」により近いと考えられる。
- 注 4) 本研究でいう住環境運営とは、①建物・外部空間など物的環境の改善、②物的環境の維持管理、③子育て・福祉・防犯など居住者の生活支援、④行事の企画・運営、⑤以上を遂行するためのグループ・組織の設立・維持、⑥以上にかかわるルール・しくみの形成など、住環境の維持保全にかかわる行為の総体を指す。住環境の維持保全に直接関係のないサークル・教室など純粋な趣味的活動はこれに含めない。
- 注 5) 他に、都市や地域の「文脈（コンテクスト）」に言及した研究には、①建物・庭・路地・道・街区・地区の関係に見いだされる空間構成原理を「文脈」と呼ぶもの（参考文献 16・17）、②建築家やプランナーが計画行為において敷地周辺や当該地域の持つ歴史・文化・空間をいかに理解しているかを考察し、そこに見いだされる「捉え方」や、形態・空間の設計に引用される「意味」を「文脈」と呼ぶもの（参考文献 18・19）等がある。
- 注 6) 本来なら、認識、発意、実行の 3 段階についてそれぞれの主体が存在するが、今回は、課題を認識したままの段階でとどまり、発意に至っていない行為は対象外としたため、認識と発意を一体的に扱っても問題はない。
- 注 7) 組織と解決行為のプロットを試行錯誤する過程で、ニュータウン開発後に形成された組織（分館、連協、街角広場など）が、ニュータウン開発当時から存在していた組織（団地自治会、公的機関、学校、商店会、東町会館など）の間をつないでいることを見出したため、前者を後者の中間にプロットできるような枠組みを考案した。上下の振り分けについてはエリアの「広さ」に基づき行っているが、左右の振り分けについては、解決行為の関連（矢印）がより多い組織どうしを相対的に近くに配置している。
- 注 8) 1999 年 11 月の経済対策閣僚会議決定において「歩いて暮らせる街づくり構想」が位置づけられ、新千里東町はモデルプロジェクト（全国 20 カ所）の一つに選定された。調査検討委員会は地域の意見をプロジェクトに反映させるため組織され、ここに当時の連協会長 A、公民分館館長 C、防犯会長 D、社協会長 F、商店会理事長、中央地区協議会会長の 6 名が地域から選定された。当委員会は事業推進のために一時的に設けられた組織であり、図 3 には組織としての記号で表現せず（箱型に囲まず）、豊中市からのよびかけ型の行為として、豊中市とこの 6 名を二重線の矢印で結んでいる。

（2011 年 9 月 10 日原稿受理、2012 年 1 月 23 日採用決定）